

私学の魂

光塩女子学院中等科・高等科

努力派の4科生にアクティブな「総合」型入学者を加え 変わらぬ真摯な教育姿勢と先進性を併せ持つなかで 「世の光、地の塩」の子どもたちを見守り育てる 小規模で温かなカトリック系女子進学校

「あなたがたは世の光、あなたがたは地の塩である」。この聖書の一節の言葉を由来に、1931（昭和6）年、光塩高等女学校の名で発足した光塩女子学院。設立母体であるスペイン発祥のベリス・メルセス宣教修道女会は、いまま世界各地で社会の必要に応じて貢献する活動を続けています。昨年2015年までは第2回入試のなかの選択形式で行われてきた「総合」型入試を、今春2016年からは、2月1日に独立した形で第1回入試として新設した光塩女子学院中等科。その導入～新設の経緯と手ごたえも含めた同学院の教育について、今回は新校長の荒木陽子先生と、学校企画室長・国語科主任の佐野摩美先生にお話いただきました。



校長 荒木陽子先生



学校企画室長・国語科主任
佐野摩美先生

DATA 1

光塩女子学院中等科・高等科

沿革	1931（昭和6）年	光塩高等女学校設立認可。光塩高等女学校開校。
	1947（昭和22）年	学制改革に伴い光塩女子学院と改称し、高等科・中等科・初等科を置く。
	1955（昭和30）年	光塩女子学院幼稚園開園。
	1979（昭和54）年	3号館竣工。
	1980（昭和55）年	創立50周年を祝う。
	1990（平成2）年	4号館竣工。
	2001（平成13）年	5号館竣工。創立70周年を祝う。
	2006（平成18）年	創立75周年と創立者マドレ・マルガリタの列福を祝う。
	2008（平成20）年	2号館竣工。
	2015（平成27）年	6号館竣工。

校長 荒木 陽子

所在地 〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 2-33-28
TEL：03-3315-1911
<http://www.koen-ejh.ed.jp/jh/>

交通 東京メトロ丸の内線「東高円寺駅」より徒歩7分、同「新高円寺駅」より徒歩10分。
JR中央線「高円寺駅」より徒歩12分

創立80周年を迎え校舎もリニューアル。 変わらないことは「自己肯定感」の尊重

杉並の閑静な住宅街の一角で、光塩女子学院は創立80周年を迎える歴史のなかで、小規模で家庭的な、面倒見の良い教育を営々と実践し続けてきました。

その光塩女子学院中等科・高等科の校長に、この2016年春から就任したのが荒木陽子先生。光塩の歴史（戦時中を除く）で、シスター以外で初めて校長に就いた先生です。

「私は卒業生でも信者でもありませんが、キリスト教の価値観に深く共感しています」

これまでカトリック学校が維持してきた理念や教育姿勢は変わることはないものの、運営方法などは今後少し変わってくるのでしょうか。

「根本的なところは変わらないと思います。ただ、これまでは校内にシスターの姿があるだけで、子どもたちをこうして育てていくというカトリック校の精神や学校生活の雰囲気、説明しなくてもある程度イメージとして伝わる面があったと思います。そういう部分が少なくなってくるでしょうから、これからはもっと言葉とか、別の形で伝えていく必要はあると思います」と荒木先生。

現在は、校舎の建築（キャンパスのリニューアル）工事も、半ばまで進んだところ です。

「すでに中等科の校舎は8年前に建て替えました。中央に吹き抜けがあって、教室を出ると、広い廊下のスペースで子どもたちも休み時間を自由に過ごせるようになっています。また吹き抜けがあることで、他のフロアの学年の声や動きも少し伝わってきます。いまは外に子どもが遊べる原っぱなども少ないですから、多くの子どもたちが集まり、声が聞こえる空間にしたかったです。光塩は共同担任制で、学年でまとまって子どもたちを育てていこうという考え方がありますので、互いの存在を感じられるような環境も大事だと



地上の校庭・中庭に加え、地下には体育館が3つもあり、生徒が身体を動かす運動スペースも十分ある。



校内の各所にマリア像が飾られ、生徒の学校生活を優しく見守っている。

考えました」と荒木先生は校舎の雰囲気を見せてくれました。

一見、小規模なキャンパスに見えますが、公道を挟んで空中廊下でつながれた各校舎と校庭の地下には、地下2階までの空間が広がり、そこに聖堂や体育館が存在します。これらのスペースを合わせると、意外に広いキャンパスのなかで、光塩女子学院の生徒たちは、大らかに日々の学校生活を過ごしています。

取材に訪れた5月下旬は、ちょうど同学院の高等科校舎が解体～新築工事の最中で、やがて新たな教育環境が整う過程にありました。

「現在工事中の高等科の校舎は8月には完成し、2学期からは高校生がそこに入ります。次はこの中央棟の解体を始めて、2018年度末には完成する予定です」

教育環境のリニューアルを完成しつつあり、新たに荒木先生を校長に迎えた光塩女子学院は、この先の未来に向かう新たな一歩を踏み出した再スタートの時ともいうことができそうです。

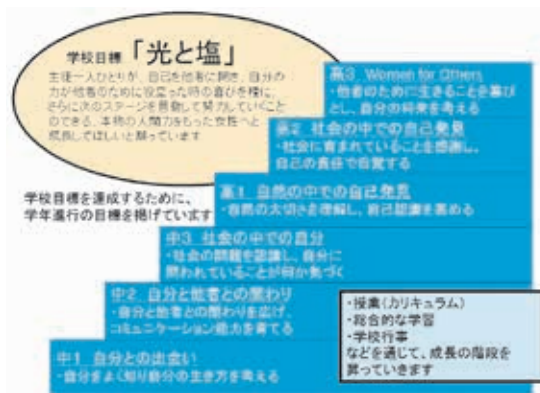
「決して変わることがないのは、本校の『あなたがたは世の光、地の塩である』という校名の通り、一人ひとりが存在すること自体素晴らしいことなのだから、何より生徒には自己肯定感を持ってほしいと考える教育姿勢です。かつては『世の光、地の塩になりなさい』という解釈もあったようですが、いまは、子どもたちはもちろん、人間一人ひとりが“あるがままの”存在で世の光、地の塩だと伝えていきます」と荒木先生。

創立から受け継がれる「共同担任制」で、 生徒一人ひとりの成長を見守る

光塩女子学院中等科・高等科の教育のひとつの特徴は、創立時から続けられてきた「共同担任制」です。

そして、光塩女子学院では、校名でもある「光と塩」の学校目標のもとで、生徒一人ひとりが、自己を他者に開き、自分の力が他者のために役立った時の喜びを糧に、さらに次のステージを目指して努力していくこ

とのできる、本物の人間力をもった女性へと成長することを願っています。この学校目標を達成するために、改めて学年進行の目標（下記）を掲げました。



「学年ごとに目標を持つだけではなく、先々各学年のつながりを見通して、すべての教科の教員と共同担任がこれに関わり、子どもの成長を見守り、それに役立つものを取り込んでいきたいと考えて、この学年目標を明らかにして共有できるようにしました。

中1では自分との出会いで自己肯定感を確認し、自分を大切に思えなければ、他人も大切にできないというところからスタートします。次に中2では、友達とのコミュニケーション力を育てるために、他者との関わりを大事にします。そして中3では、もう少し意識を広げて、社会との関わりに目を向けていきます。これは倫理や社会科の授業ともリンクしてきます。

高1では社会との関わりをもう一歩進めて、理科や数学の授業との関わりも含めて、自然との関わりを見つめていきます。そして高2では、自分の職業と大学進学とを改めて考え、高3では、卒業にあたり、自分がここで学んできたことを考え、将来の道を探してほしいと思っています。こうした道筋を、これまで教員の間では意識していたのですが、改めてしっかり共有して、子どもたちの成長を見守っていききたいと思っています」と荒木先生。

中1での「自分との出会い」から、高3での「Women for Others（他者のために生きる）」までの各学年目標は、まず現代の子どもたちにとって大切な「自己肯定感」を高め、それをベースに他者や社会、自然との関わりを広げ、その広い社会に育まれていることを認識して、やがては他者のために生きることを喜びとして、自分の将来を考えると、まさにカトリック学校の教育理念を反映したものです。

「光塩が大事にしている『自己肯定感』の話の説明会などですと、保護者にとっても共感していただけます。

子どもたちにはもちろんですが、現代は大人＝保護者や日本社会全体に自己肯定感が求められている時代なのではないかと思います。いまは皆が競争していく時代というよりは、協働して、いろいろな意味でシェアしながら共生していく時代ですよ。生徒のなかには社会に出てトップで活躍する子もいるかもしれませんが、むしろチームで動く（ネットワーク型の）仕組みのなかで活動する方が、光塩の卒業生には合っているのではないかと思います、期待しています。

在学中にもそれを経験していますし、私たち自身も共同担任制ですから…。そして共同担任制のもうひとつの意味は、本校の創立者のマドレ・マルガリタが言っていた『家庭的な環境で子どもたちを育てましょう』ということ、『学校も家庭的な雰囲気大切』という考え方です。やはり子どもたちは家庭のなかで育つものですから…。高度成長の時代には、父親が大変で難しい面もあったかもしれませんが、いまはまた家庭を大切にすることが見直されていますよね。私たちの学校はそれを創立以来続けてきています。

共同担任制では、子どもたちを多くの目で見ること、いろいろな面が発見できますよね。それと、教員間で相談できることも大きいと思います。クラスの問題は学年の問題として共有することができます」と荒木先生。光塩女子学院では、この共同担任制を創立時から続けてきたといいます。

「最初は1クラスだった入学者を、シスターと日本人の先生と2人で見ていたようです。その後も現在までその伝統が受け継がれてきました。生徒と教員には、やはり相性もあります。共同担任制の場合は、生徒に何か悩みや心配事があっても、それぞれが話しやすい教員と相談することができます」と荒木先生。

この「共同担任制」は、中等科では4クラスを6名の先生が、高等科では3クラスを6名の先生が「共同担任」として受け持ち、生徒の学校生活と日々の成長を見守っています。



登校すると校内では制服の上に着用するスモックをはおる。ピンクと水色は自由に選べる。

「共同担任制が機能するのは、この小さな規模によるところもあると思います。現在は中学の定員が160名で40名の4クラス、高校もほぼ同じで、50名の3クラスになります。初等科からの生徒は海外転勤などで転校する生徒もいるため、約70名です。中等科からの入学者がほんの少し多いくらいで、ちょうどいいバランスなのかもしれません」

また、今年2016年度からの「英語教科書の変更(中1の学年から『プログレス・イン・イングリッシュ21』→『ニュートレジャー』へ)」、昨年2015年度から導入された「進級留学制度」など、同校の教育をさらに進化・発展させる試みが重ねられています。「情報技術」の面でも、①全教室に大型モニター設置、②校内LAN完備、③校内LANの無線化(進行中)、④電子黒板の導入(進行中)、⑤生徒用タブレットPCの導入(進行中)など、新たな時代に即した教育環境も整えつつあります。光塩女子学院では、子どもたちが生きる将来の社会で求められる新たな力を育てるために、教育プログラムも進化させ続けているのです。

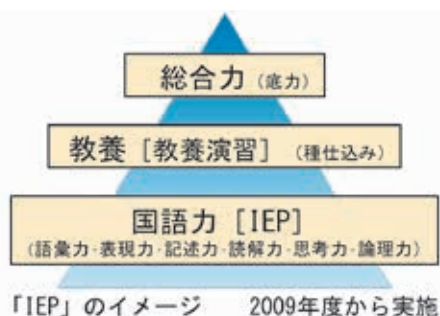
7年目を迎え2月1日入試として独立させた「総合」型入試の手ごたえと展望

光塩女子学院では、今春2016年の入試から、それまで第2回入試のなかの選択制で行ってきた「総合」型入試を、あえて2月1日に独立した第1回入試として実施しました。そこには計72名の志願者(70名の実受験者)が集い、合格者のなかから36名が入学したといえます。

この「総合」型入試とは、どのような試験なのでしょうか。その出題方針を、光塩女子学院では、「『初めて目にした問題(文章・図表)について、今まで学習した小学校レベルの基礎知識を用いて、自分の頭を使って読み解き、きちんと思考して論理的に表現する力』を評価します」と公表しています。

「この『総合』型入試は、2010(平成22)年から導入しました。導入の初年度は、この入試で入学した生徒はわずか3名でしたが、その翌年から4名→7名→5名→8名→10名と増え、今春2016年入試では36名が入学しています」と佐野先生。中等科からの入学者の半数近くが、この「総合」型入試で入ってくるようになったということです。

「『総合』型入試の考え方のベースは、それ以前から導入していたIEP(インテリジェンス・エボリューション・プロジェクト)にあります。もともと国語科で『評論をたくさん読もう』と始めた企画で、中1・中2では基礎、中3から高2では教科書以外に毎年12編ず



つ、加えて高3では文系の生徒を中心に更に多くの文章を読み、多読を通して『世界』・『知』・『存在』等いろいろなテーマに就いて考え、底力をつけるというものです。このプロセスを通して、ロジカルシンキングの力は勿論、『語彙力・表現力・記述力・読解力・思考力』を涵養することを目指しています。『国語はすべての学びの基盤』という考えから進めてきました。

実は、すでに15年前から『教養演習』という授業で、教科の枠を超えて教養のベースをしっかりと身に付けてもらい、総合的に物事を考える訓練を続けてきました。文系の生徒に理系の教養を、理系の生徒に文系の教養を!との思いを込めて始めたのです。もともと小論文の種仕込みを目論んでいた授業が功を奏し、導入後の早い時期から出口の大学入試で合格率が上昇しました。

光塩の6年間の学びを通して生徒一人一人を夢の実現に導くことができるという確信のもと、2010年に第1回の『総合』型入試を実施しました。ちょうどその頃に、近隣エリアで2月3日に入試を実施する公立中高一貫校がいくつも開校しました。その競合から逃げるのではなく、光塩独自の姿勢を示すことで『打って出る』という思いもありました。中等科入試の時点では、例えば理・社の知識が十分でなくても、“その場で考える力があり伸びしろがある”子どもたちに光塩を知ってほしいと強く思ったのです。光塩の学びによって総合力を培い、大学入試のハードルを越えて夢が叶



各科の教員は専門性が高く授業の水準は高いが、そうした学習に生徒は日々真面目に取り組む。

うことで『自己肯定感』が高まります。これは、光塩の教育の基本的な考え方とも繋がっているのです」と佐野先生は、導入当初（2010年）の経緯を教えてくださいました。

その「総合」型入試の導入初年度は、志願者も入学者もまだ少なかったのですが、当時から確かな手ごたえを感じたといいます。「答案がとても素晴らしくて面白かったのです」と荒木先生、佐野先生。

「ただ、受験勉強に慣れていない受験生も多かったようで、時間配分がうまくできず、記述答案の途中までは満点に近いような良い解答だったのに、最後まで書き切れていない子も見られました。それが少し残念ではあったのですが、『この子は必ず伸びる』という確信のもとに合格を出して、その後の成長を見守ってきました。そして今年、導入初年度の入学者が卒業するに至ったのです」と佐野先生。

『「総合」型合格者の中には、成績が途中から急激に伸びたり、総務（生徒会）の役員に立候補したり、ポスターコンクールで優勝したりと、活躍が目立つようになりました。とにかく授業でも反応が良く、手を挙げて発言して先生に最初に名前を覚えられるのも『総合』型の生徒が多いという声が多く聞かれるようになったのです」と、荒木先生、佐野先生は、その生徒たちの成長を喜びに話してくれました。

光塩らしい努力型の4科生・初等科生と、元気な「総合」型入学者が良い“化学反応”を！

「今年の入学者のなかには、『国境なき医師団』に興味があって、小学校時代に両親とアフリカに行ってきたという生徒もいました。そういうタフな子どもたちが入学してくれました。そこで、『総合』型入試の募集人数を増やして、底力のある子どもたちをもっと迎え入れたいと考えたわけです。

従来からの4科目入試で入ってきた生徒にも良い刺激を与えて、お互いが“化学反応”を起こした印象でした。初等科や4科型の生徒は、コツコツと真面目に勉強してきた子が多いのですが、やや冒険心に欠けたり、ときには面倒がったりしてしまう面もある一方で、総合型の生徒は臆せず手を挙げ、授業のなかでアクティブに動く生徒がいます。双方でとても刺激になっているようです」と佐野先生。

「発想も少し違いましたね。そんな考え方もあるのかという発見を、他の生徒ができたという面も大きかったと思います」と荒木先生。

「わざわざディスカッションとかグループワークを設定しなくても、そういう生徒がポンポンと発言するの



お昼休みはみんなで昼食。校内には生徒に大人気のパンの購買もある。

で、いつのまにか授業がアクティブラーニングになっていた面もあると思います」と佐野先生。

そういう『総合』型の入学者が入ってきたことで少しずつ良い変化が起こってきたことが、光塩に新たな活気をもたらしているようです。

「そういう良い刺激や変化がある一方で、光塩にはこれまで4科目型でコツコツと努力してきた生徒が多いという伝統がありました。私自身は光塩の卒業生ではなかったのですが、最初に赴任したときには、真面目に努力することがきちんと評価される光塩の教育の在り方は、すごく新鮮でした。そういう土壌があるところに、『総合』型の入学者が加わって、互いに良い刺激を受けたということだと思います」と荒木先生。

『「総合」型の生徒も、4科目型の生徒の影響を受けていつのまにかコツコツと勉強するようになるという良い変化があったと思います」と荒木・佐野両先生。

今春2016年から来春2017年にかけて、私立中学校の入試の多様化が加速しているなかで、そうした新たな入試の手ごたえをすでに2010年から感じていたというのは、光塩女子学院の先生方の先見性・先進性といえるでしょう。

「先ほどもお話しした通り、15年くらい前から『教養演習』を取り入れています。現在、教科の枠を取り払った、融合型とか合科型とか、あるいは適性検査型・PISA型入試や、IB（国際バカロレア）も含めた幅広い学びの枠組みが注目されていますが、それ以前から光塩では、異文化理解・日本社会・生命倫理や科学の話、環境や自然災害の話などを授業のなかで盛り込んでいました。教科の専門の知識だけではなく、さまざまなものを『結びつけて』考える力、広い教養は大事ですよ」と佐野先生。

「それができたのは、かえって小規模な学校だったからだだと思います。共同担任制のベースには教科内でも学年でも、互いの知識や問題意識を共有するという姿

勢があります。その意味では、教科の枠を超えた授業を作るうえで「教科の壁」はあまりなかったように思います」と荒木先生。

『総合』型入試の素材文にも、その時その時の時事的な出来事や災害について考えを巡らし、思いを馳せるようなテーマを出題してきました。最初は豪雨が多かった年でしたので『自然災害』をテーマにしました。翌年はバーチャルではないリアリティを大切にしたいという文章です。その翌年は「3.11」の翌年でしたので『温故知新＝過去に学ぶ』というテーマでした。そして『時の流れ』、『異文化理解』、『自然と生活』、そして今年は『人類の未来』をテーマに出題しました」と佐野先生。

『総合』型入試での 過年度の素材文出題例

トピック

- ・2010(平成22)年/自然災害(「風と向き合う」高田宏)
- ・2011(平成23)年/風景(「花鳥風月の感性」秋山豊寛)
- ・2012(平成24)年/温故知新(復興)(「日本建築に宿る温故知新の心」鈴木エドワード)
- ・2013(平成25)年/時の流れ(「心を耕してくれる永遠の人」柳田邦男)
- ・2014(平成26)年/異文化理解(「虹にはいくつのか色があるのか」鈴木孝夫)
- ・2015(平成27)年/自然と生活(「雪の話」中谷吉郎)
- ・2016(平成28)年/人類の未来(「もっとも大切なのはいのちを守ること～21世紀の読者へ」宮脇昭)

来春2017年入試では「総合」型入試の 募集定員を約15名→約25名に増加へ

「いわゆる災害などのリスクに直面したときに、身に着けた知識をもとにきちんと自分で判断できる、そういう力を光塩の6年間で育てたいというメッセージを発信するつもりで出題してきました。まず入試でこういうテーマについて考えてもらい、そして入学してからの6年間の学びで、各自のめざす専門や、生徒同士のチーム力を生かして学際的に学び合い、最終的には高3の目標である“Women for Others(他者のために生きる)”をめざして、総合的な力を蓄えるという流れを意識しています。その目標に向けて、光塩の教員は、英語でも現代文でも古典でも『どうやって現代の問題解決につなげるか』という意識で授業をしていると聞きます」(佐野先生)

そういう「総合」型入試の問題を作成するうえでも、その賛否やテーマについて、先生方同士で議論が行われたことが想像できます。

「それはありました。でも議論しながらも、方向性が決まれば協力して進めていく雰囲気がかもともありま

す。そういう土壌が共同担任制で培われてきたともいえると思います。反対意見であっても遠慮なく、対話的な議論が行われる雰囲気があります。ただ『総合』型入試は、最初は少人数で検討を始めたことも良かったのかもしれない」と荒木先生。

先に「答案がすごく良い」と先生方が感じてきた「総合」型入試の答案は、今春2016年入試でも素晴らしいものだったのでしょうか。

「もちろん数が多くなった分、いい答案にたくさん出会えました。ただ今年は最後の記述問題が手ごわかったようで、時間配分が難しく、最後まで行き着かなかった受験生もいたのが残念でした。私たちが最も答案を読みたかった問題でもありましたので、来年以降はもう少し工夫したいと思っています」と佐野先生。

光塩女子学院が、この「総合」型入試で求めている力は、改めて整理すると、①思考力(Intelligence＝考える力)、②論理性(Logic＝筋道を立てる力)、③基礎力(Basis＝基礎となる知識)、④読解力(literacy＝読み取る力)、⑤表現力(Expression＝書く力)で、それをひと言でまとめると「結びつけて考える力、それを表現する力…」だといいます。

来春で8年目を迎える、光塩女子学院の「総合」型入試。今までの手ごたえから2017年には、さらに募集定員を増やす形に踏み切ります。また入試科目「国・算2科と総合」を「国・算基礎と総合」という表記に変更しました。その意図について佐野先生は「社会・理科の受験勉強がまだ十分でなくても、国・算の基礎学力があり、伸びしろのある“タフな”小学生を迎え入れることができると考えています」と言います。

そうした「総合」型入試に関する先生方からのメッセージは、多くの小学生と保護者にとっての“希望”でもあります。同時に、従来からの4科目型の受験生も含めて、光塩女子学院をめざす受験生が一人でも増えることを期待したいと思います。



吹き抜けのある校舎の教室や廊下には明るい陽光が差し込み、天気の良い日は照明も不要だ。